

温故知新

ロータリーの今昔

遠藤健三





「ロータリーの友」創立三十周年記念として
ロータリーの友委員会から贈られた記念盾

岐阜ロータリークラブは一昨年創立五十周年を迎えた。国内では十七番目のクラブであり、地区内では、同年にや、遅れて創立された四日市RCと共に最も古い歴史をもつクラブである。遠藤健三氏はチャーターメンバーとして創立に奔走し、その後五十年をロータリーと共に生き抜いて来た方である。

本年度のガバナリー月信に、その思い出の数々を連載することをお願いしたところ御快諾を得た。今回、その連載をまとめて冊子とした。ロータリーの貴重な歴史を書残していただけに深く感謝申上げる。

(文中敬称略)

1、岐阜ロータリークラブの創設

私がロータリーを知ったのは、一九三〇年に一年間世界二十六ヶ国を旅行した折であった。殊に北洋北極圏をスウェーデン国王所有のステフポラリス号(現在は西武プリンスの所有で、沼津木負沖でホテルとレストランになっている。北欧料理が美味)で遊覧の折、船中で国籍が異っても、どこであってもやあーと言ひ、遠い時には手を振り合う友情の発露に触れ、その人達がロータリークラブのメンバーであることを知った。そしてローマでは、夕方八時から例会の場に遇ったが、庭園芝生で食事をし、興にのればダンスをするなど一時間を有効に、実に愉快にエンジョイして散会するのを見て、羨しい仲間だと思つた。

帰朝後、友人のお伴をして、東京では工業クラブ後に帝国ホテル、名古屋では観光ホテルでの例会に伺つている内に、友情を深め時間励行をしているロータリーの特質に触れ、岐阜にも設立したいものだと思つた。当時、岐阜での会合は岐阜時間といつて一時間遅れは平氣の習慣で、またそれを皆承知して集合するという状態であつた。「これはいかん、ロータリーでは是正したい」と決意して、尚和会の仲間語り、同意を得た。尚和会というのは岐阜財界の二世による親睦を兼ねての研究会である。そして設立について相談を初めたが、長幼の序もあり何事も長老の御意見を伺ひ従つてという不分立が望ましい習慣として岐阜にあつたので、御相談申上げたところ、長老の皆さんは時期尚早と申されて、暗礁にのりあげてしまつた。

しかし、私は、何とかしたいと熱意をもつて長老と折衝しているとき、私が大正十四年岐阜商業に校長長野廉二と創設した野球部が、創設八年有半の昭和八年四月に、大毎主催の春の選抜大会で初優勝した。この優勝に市民、県民は熱狂し興奮し、大喜びであつた。そこでこの機に乗じて長老を口説き、遠藤に委せても大丈夫と同意を得るまでに漕ぎつけ漸く昭和十年(一九三五年)四月十五日に発会式、六月二十一日に第三八四四号の認証状を受け、八月二十六日(月)にチャーターナイトを長良川ホテルで挙行了。朝鮮・北海道・国内各地から二五〇人の参加者があり、これに会員、家族とお手伝が一〇〇人、合計三五〇人にのぼり、岐阜では未曾有の集會となつた。しかも、参加者は全国トップクラスの実業人の参集で、当時の知事や松尾国松市長もびつくり仰天だつた。然も当日は前日來の大夕立も晴上り、晴朗な天気のもと、空気が清く、長良川の水もきれいで素晴しかつたので、後々までも全国ロータリアンの語り草となり、岐阜を広く紹介することとなつた。

岐阜RCは国内では十七番目、第七〇区に所属した。当時、朝鮮・台湾・満州が七十一、七十二区であつた。会長篠田樹一、幹事遠藤健三でスタートしたが、愉快に友情を高めつつ、地区大会は勿論、国際大会で海外迄出席した。発足当時、時期尚早論であつた長老達がすこぶる熱心で、進んで出席し、ほつとした。

岐阜時間もロータリーの時間厳守が、まず商工会議所の会合から改善され、岐阜時間の解消が実現し時間励行されるようになった。

2、日本のロータリークラブ

そもそもロータリーはポール・ハリスの捉唱によつて一九〇五年（明治三十八年）に創立されたが、この年は、日本では日露戦役に大勝したものの国内の不況は甚しかった。これはアメリカ、シカゴにおいても同様で、この大恐慌時代に、人心のすさんだ中で創立したところに、ポール・ハリスのロータリー精神の基盤がある。

日本では、一九二〇年に米山梅吉と福島喜三次が非常に奔走し、東京ロータリーが第八五五号で創立され、米山が会長、福島が幹事となった。当時は例年は月一回であったが、福島は例会三回出席の後、関西担当重役として大阪に転動した。そして星野行則、平尾釭三郎、伊藤忠兵衛と出会い、一九二二年（大正十一年）十一月十七日に、星野会長、福島幹事で大阪RCが発足した。第一三九四号であった。東京、大阪RCは福島が本部と直結したので兄弟クラブであると力説された。

特筆すべきことは一九二三年（大正十二年）九月一日午前十一時五八分、関東大震災で東京横浜が壊滅したとの報が全世界に報道されるや、RI会長カイ・ガンディカーから見舞電報と二、五〇〇ドルが大坂クラブを通じて東京クラブへ送られ、さらにシカゴから一、五〇〇ドル、サンフランシスコとニューヨークから各一、〇〇〇ドル全世界の五〇三RCから総額八五、〇〇〇ドルに達する義援金が送られた。

これによつてロータリーの良さが日本人に理解され、以来、一九二四年に神戸、名古屋、一九二五年

以降に京都、横浜、広島、札幌、福岡、小樽、岡山、門司、今治、函館、旭川、一九三五年以後は帯広、岐阜、金沢、徳島、静岡、四日市、浜松、郡山、長崎、宇和島が設立された。

ポール・ハリスによるロータリー設立後十五年で東京、十七年後に大阪、神戸、二十年後に名古屋、三十年後に岐阜ということになる。ロータリークラブの設立順位をみると、地方の実力、発想と各分野での誕生が同じように思える。国立銀行から民間銀行の誕生が岐阜は十六番目で、十六銀行であったが、岐阜ロータリーの創立が十七番目であったことは、岐阜のそうした地位を示しているともいえる。ただし、私が呼びかけた時にスムーズに話がすすんでいけば、札幌、小樽に次いで十二番目の設立になっていた筈である。

3、日満ロータリー連合会

一九二七年京城、一九二八年大連、一九二九年奉天と朝鮮、満洲におけるロータリーの設置がすすみ、一九三九年（昭和十四年）七月から日満ロータリー連合会の設置が認められ、一九四〇年（昭和十五年）五月五・六日に第一回年次大会が横浜で五四二名の出席のもとで開催された。年度が変わつて八月十日に岐阜で日満地区協議会が開催されることになつていったが、ロータリーのあり方につき議論が沸騰し、過激な意見も続出し、解散を唱えるクラブも出る程となつた。開催地の岐阜RCの幹事の私に右翼の抗議があつて、ほとほと困つていた。たまたま私は橋本

欣五郎大佐、岐阜六八聯隊の中馬、天野両大尉、郡上八幡出身の憲兵伍長野島尚明との交友があつたの

で少し静まったが、時局柄、天下の名士を集めて協議会を敢行することは危険もあり穏当でない、岐阜RCの長老からの意見も出たので、私は直ちに上京して日満ロータリー連合会米山梅吉会長に状勢をつぶさに報告して指示を仰いだところ、直に中止と決定され、三井銀行重役室から全国各クラブに中止を打電し、収まった。中止とはなつたが、岐阜RCとしては千載一遇の機会を得て、得難い体験を得た。しかし、その後、世の中は英語まで追放し、スポーツの審判用語も「駄目」「よし」となり、つづいて、野球、蹴球は敵国の競技ということで行えなくなる程となつた。こうした情勢の中で、ロータリーの存在が好ましくないという空気が濃厚になり、各クラブが次々とロータリーを脱退した。そして、その精神と組織を温存し、名称を〇曜会などと称して例会を存続した。岐阜RCは岐阜卓金曜会と称した。日満ロータリー連合会は一九四〇年（昭和十五年）九月四日、国際ロータリー離脱を決意し、解散した。岐阜RCでの会員の出席は極めてよく、昭和十二年と十四年に八十六%、八十八・五%でそれぞれ国内ロータリー優勝旗、日満ロータリー優勝旗を獲得し新京まで受賞に行つた。そしてレプリカ優勝旗と優勝旗はそのまま岐阜にあったが、例会場を当時の丸物百貨店（現近鉄）の食堂に移していたので、戦災で焼失した。残念至極であつた。

4、国際ロータリーへの復帰

第二次世界大戦後、国際ロータリーに復帰した最初の被占領地のロータリークラブはグアムで、一九四五年（昭和二十年）にはフランス、ベルギー、オ

ランダ、ノルウェー、フィリッピンの六十六クラブ、敗戦国からはイタリアのクラブが最初に復活した。

日本でも戦災復興が徐々にすすみ、落付いて来たので、あちこちでRCの復帰の声と希望が出て来た。

この状況の中で、一九四六年（昭和二十一年）四月二十八日、日本のロータリーの祖米山梅吉は郷里沼津に疎開したまま、そこで長逝した。さらに同年九月十七日、福島喜三次も六十五才で亡くなった。それから半年も経たぬ一九四七年（昭和二十二年）一月二十七日、ポールハリスが七十九才で逝去した。

ロータリー復帰の動きは一九四七年（昭和二十二年）三月十八日、東京の工業倶楽部に各地各曜会の有志が集まり、東京水曜会の会長小松隆がロータリー復帰協議会会長となり、講和条約が締結されたら復帰できるように準備することになり、東京RCが世話役、伊藤多度作が幹事、柏原孫左衛門が会計で世話して下さることになった。折しも、国際ロータリー中央アジア駐在員として、インドボンベイにいたジョージ・ミーンズが帰米の途次、一九四八年（昭和二十三年）九月一日、東京のロータリー復帰協議会を訪れ、小松会長の案内で東京水曜会の例会に出席した。この日は二十五年前の関東大震災記念日であり、アメリカ全世界のRCから心のこもった手厚い慰問を受けた記念の日であった。翌日には小松会長に伴なわれて神戸水曜会の例会、さらに翌々日には大阪金曜会を訪れて里見会長と懇談し、午後は京都のホテルラクヨーで京都水曜会の絹川清と懇談し、その夜に東京へ引返し、九月七日空路アメリカに帰った。翌年三月十一日、ミーンズは何の前ぶれもなく羽田に再び飛来した。

ミーンズは、まずGHQのゲーギンと連絡をとり小松と交替した復帰協議会々長手島知健と会い、また東京水曜会の役員とも会見して、いよいよ国際ロータリーに復帰が可能になったと宣言した。ミーンズはマッカーサー元師の了解を得たというが、特に実業家の経済界追放を受けている者でも、会員資格としてはあまり追放にとらわれず、良識に任せるようにと、GHQのホイットニー局長の了解をも取りつけたのであった。さすがにロータリーなればと痛感した。そして東京RCは一九四九年（昭和二十四年）三月二十九日に復帰承認を受け、四月二十七日に東京水曜会の工業倶楽部で、会長小林雅一にミーンズの手から認証証が渡された。登録番号は一九二〇年認証の時と同一番号の八五五号であった。以後復帰承認は元のチャーターナンバーに復活承認された。この会には吉田首相も出席し祝辞を述べた。またGHQ総司令官マッカーサー元師とステートメントもあったが、それには、戦後日本で国際団体に入を許されたのは、宗教関係を除けばロータリーが最初であること、更に名譽会員となることを光榮とすると記されてあった。

復帰は東京に続いて、京都、大阪、名古屋、神戸、福岡、札幌の計七クラブで承認され、この七クラブで六〇地区を形成することとなった。初代ガバナーク候補は東京クラブに一任し、手島知健が選出され、一九四九年（昭和二十四年）三月二十六日、初代ガバナークに就任し、六月一日、国際協議会に出席するために羽田を飛び立ち、七月一日から六〇地区が発足した。一九五〇年（昭和二十五年）四月八日、第一回の地区大会が同志社大学栄光館で三十クラブ、

六百八十一名の参加を得て行なわれた。手島知健は二期目もガバナークを務めることとなった。

この大会には、日本が国際ロータリーに復活した年度のRI会長として復活に署名したアングス・ミンチェルがRI会長代理として派遣され、すこぶる盛会に行なわれ、ロータリアンの喜びは絶頂に達していた。ところが大会の和室に無雑作に投げ置かれてあったミッチェルの鞆が、ほんのわずかの間に失なわれる事件が起った。会場にこのことが伝えられるや、全ロータリアンは驚愕し、しゅんとなり声も出なかった。日本人の不信行為を天下にさらすであらうと、ひたすら無事に返るよう神かけて心から念願した。一夜あけ、日本のロタリアンから、日本のロータリアンの恩人に損害をかけては相済まぬと、誰言うともなく被害弁償をとの雰囲気場内に充滿した。

事件が国際的な場のことであったため、警察は長時間の動員を行なって捜査し、新聞・ラジオも協力して報道した。やがて洛南の小屋の中にあつた鞆が投書によつて見出され、一週間経たぬ間にミッチェルの手許にもどつた。ミッチェルはその日、戦後新規承認第一号クラブとなつた一宮RCのチャーターナイトに手島ガバナークと共に招かれ、出席していたが、これを聞き、席上でウォルディング・マルチダを歌うほどに喜んだ。鞆から現金を紛失していたが、無名の人から封筒入りの十一万円が届けられ、ミッチェルはこれをYMCAとボーイスカウトに寄付した。こうしてお互に大きな善意の印象を双方に残し、友情に大きくプラスした。

一九四九年（昭和二十四年）十二月八日に第三八

四四号で岐阜RCが再認証された。シカゴ本部では復帰といえ皆チャーターとして正式にロータリーの入会手続をとらせ、既設のクラブが特別代表をたてての結成が行なわれた。創立会員二十名、復活初代会長矢橋亮吉で、翌年七月十五日にチャーターを催したが、それからのチャーターナイトのあり方が変わったといわれる程のものであった。二百六十名あまりの多数が参加して長良川に屋形船をかべ、万燈流しや仕掛花火で華やかな鶴飼が行なわれた。

手島はシカゴ本部の理事に就任し、三期目ガバナリーに星野行則が一九五一年（昭和二十六年）七月から就任した。星野は八十二歳の高令であったが、明治人間の気骨の代表ともいべき人物で、復帰クラブの指導に、また新クラブの誕生に、高令の身で、全国を行脚し、東奔西走、南船北馬の大活躍をした。

5、「ロータリーの友」発刊

一九二〇年東京クラブ創立から昭和十五年のRI脱退までの二〇年間にRCは四十七・五クラブとなった。〇・五は宇和島クラブが発会式だけで、本部での承認手続に至っていないからであった。

それが復帰から一九五二年（昭和二十七年）までの三年間に六十六クラブとなっており、同年七月から岐阜・三重・石川を含む東日本を第六〇地区、福井・滋賀・奈良・和歌山を含む西日本を第六一地区として分離することがRIによって決定された。そこで年次大会を待たず郵便投票でガバナリーノミニーを選出し、六〇地区に東京の小林雅一、六一地区に京都の鳥養利三郎と決定した。

かつての満州・朝鮮・台湾はこの二地区から除外されているので、小さい日本だけの地区分割はなんとなく淋しい、そして仲良く交流する連絡機関が欲しいということで、長老ロータリーマンが相寄り相談の末、両地区から選出された次の委員でそのあり方を研究することになった。

(六〇地区) 手島知健、小林雅一、柏原孫左門、遠藤健三

(六一地区) 星野行則、鳥養利三郎、露口四郎、平島健次郎

まずRIの了解をうるのが先決で、本部では各地区が勝手に作ってはいけないということで、思案しているとき、手島知健が本部理事に就任し、ときどきアメリカへ出かけることになり、出かける度に尽力してくれ、漸くガバナリーの機関ということで許され、この問題が解決された。そこで、さてどう作ろうかということになった。昭和二十七年六月に第一回を東京、同年七月三日に第二回を大阪で開いた委員会機関誌発行について協議したが意見がまとまらず、更に会合を重ねることになった。そこで私が、天下分け目の関が原ではないが、次回は日本の真ん中で行なったら、と提案したところ、全員大賛成で、八月十六日に岐阜長良川畔大竹において会合することとなった。

午前十時から食事もそこそこ、鶴飼見物も抜きで熱心に討議研究した。甲論乙駁、論議沸騰して入り乱れたが、流石にロータリーアンの集いで、双方相譲り、夜半に至って円満了承されるに至った。この案につき全クラブにアンケートを出し検討の上決定することとした。検討項目と意見は次のようである。

項目	東六〇地区	西六一地区	決定
縦書・横書	両論	横書	横書
文字	ひら仮名	カタ仮名	ひら仮名
発行地	東京	大阪	東京
価格	一〇〇円	二〇円	五〇円

創刊号発刊は一九五三年（昭和二十八年）一月、雑誌の名称についてはいろいろと提案されたが、全委員の無気名投票により「ロータリーの友」が満場一致で決定した。何をかいわん、これは遠藤案で光栄ある名付け親となった。

6、「ロータリーの友」刊行秘話

昭和二十七年八月十六日に「ロータリーの友」の名称が、その提案によって決定され、その他の刊行計画も決定をみたが、タテ書きかヨコ書きかについては意見が分かれたので、全会員の一般投票を行なったところ、二対一の割合で横書きが採用されることとなった。

昭和二十八年（一九五八）一月からの刊行が決定されたため、その刊行のための準備に忙殺された。

編集委員には六〇地区、六一地区より三名ずつが選ばれた。

(六〇地区) 手島知健(東京) 一力次郎(仙台) 遠藤健三(岐阜)

(六一地区) 望月成人(京都) 露口四郎(大阪) 平島健次郎(神戸)

主幹を一週間以内を決めたいということで、私が中央にいろんことから呼掛けたところ、横浜の小島から岡野鑑記が推薦され、交渉の結果承諾してもらった。岡野は横浜高商の田尻校長の弟子で、終

戦後校長となった俊才であるが、当時退職していた。編集室の陣容は同氏に一任し、編集主任に川崎竜太郎を迎えた。岡野はパストガバナーその他の八方からの注文をさばいて毎号発行を続けたが、その苦労は大変なものであった。「ロータリーの友」が今日に至ったのは発刊当時に岡野・川崎のコンビを得て熱心に編集に当たってくれた賜であったと思う。川崎は現在なお健在で、健筆を振っている。

スタッフを揃えたが、当時、焼野原であった東京の実情から事務局（編集室）の物色は極めて困難であった。困却の末、友人の大日本印刷社長佐久間長吉郎に、銀座六丁目の交詢社の筋向いに、焼残った同社の銀座営業所があったので、その一室の借用を再三にわたって懇請したが、焼残った大事な連絡場所なので借せないが、銀座一丁目にある大日本図書焼ビルならよいということであった。早速に訪ねてみると、窓硝子はすつとんでおり、床は凸凹、戸扉もない。佐久間は戸締り、硝子窓は用心のために直してくれるという。この状態では、ということでも無償で借り受けることに成功し、臨時燈で間に合わせて入居することになった。

ところが部屋には事務用品設備は何もない。柏原孫左衛門と私とで資金十五万円を調達し、古道具屋をあさり、古物の机、椅子、書棚を買集め、什器はお互に持ちより、やっと九月一日から事務が緒づくこととなった。部屋の中のものほども奇集めで二つと揃ったものは無かったが、斯くして「ロータリーの友」編集室は発足した。岐阜大竹旅館での決定以来、わずか半月後のことであった。

印刷のための用紙は入手困難な時期であったが柏

原洋紙店からまわしてもらい、金はある時払いということにした。

印刷所は極めて重要なことで慎重に検討したが、委員の総意で大日本印刷に決定した。社長の佐久間長吉郎は東京南クラブの会員であるが、当時の全会員二八〇〇名、発行部数三二〇〇部という少ない部数聞いて商売にならぬと言ったが、「なってもならなくても先の見透しがあるから、これはやった方がよいぞ」「それもそうだ」ということで引受けてくれ、よく協力してくれた。殊に私の推せん、既に同社に入社していた小池光三を専任として出向させ編集室の川崎と一体になって内容の新鮮充実のためによく面倒をみてもらい、チームワーク万点のコンビで仕事をすすめることができた。小池は旧制岐阜中学の昭和十九年卒で、早稲田に学んだ。

雑誌の価格については、私の主張で当初から、内容を立派にして定価百円のものを出そうと考えていた。しかし、当時としては、強制購読の本代が百円は高いということ定価五十円となった。この不足分は会員の好意により、広告で償うという提案をしていた。広告費は裏表紙三万円、裏二万円、記事中は全頁一万円、二分の一で五千円としたが、皆発行部数にしては高いといった。しかし提案をしたいきさつもあり、広告を取るのに努力をすることです承してもらったが、広告取りには大いに苦労した。私は、創刊題にはデパートを頼むこととし、デパートといえば三越が天下一だから、三万円を頼むのは三越だときめ、岡野、川崎を帯同して社長岩瀬英一郎に面談を求めた。岩瀬はもともと銀行マンでデパートマンではないので、サービスのことは何も知ら

ない人だった。「ロータリーの友」の内容を説明して、是非広告の協賛と懇願した。

「発行部数は？」

「三二〇〇部です」

「その部数にしては高いでしょう」

「しかし、それは会員の奉仕で、御協力をお願い致したいのです」

と問答中に

「ロータリーはつまらん」

と申されたので

「あなたはロータリアンでしょう。では退会届をお出し下さい」

と強硬に出て問答中、段々と声が大きくなったのか、奥から島田登美経理部長が出て来られ、社長は引込んでしまわれたので、では僕達も帰りましょうとすると

「まあまあ、是非」

という事で、最後には承諾され、なお次年度にも一回承諾していただくことで円満にお別れをした。

こうして昭和二十八年一月には創刊号を発刊することができた。

創刊号発行以来、大会、協議会にて友の説明をし友は会員のものだと力説し、一年後に百円となったが、それまでは東西各委員は広告取りに協力を願う西は露口、平島、東は柏原、遠藤の各委員が各々分担して、五〇円の不足分を償うのに東奔西走した。編集委員会の委員は、昭和二十八年二月に手島がR I理事に就任し、理事は機関紙の委員たるを得ずということ辞任し、佐久間長吉郎が代った。四月には露口から星野行則に変わったが、星野はパストガ

パナーなるが故に、RIの意向にそって辞任し、八月からは伊藤文吉(新潟)と、再び露口となり、多忙の一方は岡本信三(函館)と交替した。

当初、友の委員会は合議制であったが、二十七年十月から委員長制をとり、初代委員長に私が就任し二十九年六月までの二年度勤め、さらに三十一年六月まで委員として計四年間勤めたが、委員会には完全無欠席であった。その後委員長は露口、佐久間、兼松理(横浜)が各年度をつとめた。一九五

七―五八年度は編集審議会となり、西村大治郎(京都)が委員長、一九五八―五九年度は刊行物審議会となり、委員長に宮脇 富(パストガバナー)、一九五九―六〇年度よりは現在のロータリーの友委員会となり、引つづいて宮脇が委員長となった。その後、委員長にはパストガバナーが就任する慣例が作られ、ロータリーの友の基礎が固められた。

この委員長時代、編集会議は毎月二十日に委員会を開き、雑誌の装訂、内容等の検討を行ない、審査に合格したものを印刷所にまわし、完成の上発送となった。昭和二十九年八月号のとき、表紙に姫路の白鷺城の威風堂々を飾ったが、奥付裏表紙は日活のミーチャン、ハーチャンむきの凄いポスターそのものが用いられており、委員は皆啞然とし、異口同音に「是はいかん、駄目だということになった。そこで委員長は私が臨時休暇を願ひ、日活本社を訪れ、堀久作社長に面談した。堀社長とは日頃から交友があったので何が主旨を申し、懇談したところ、「判



「ロータリーの友」創刊号表紙

りました」と当方の申出を直ちに承諾されて変更することとなった。そのとき、社長室には偶然にも福岡博多に日活ホテルを開業するポスターがかけられていたので、それにしてみらった。委員一同にこれを報告、皆ほっとした。

こうして発刊した「ロータリーの友」は、歴代ガバナーを始め、引継がれてきた友の委員の努力と編集室とのチームワークの結晶として、加うるに返品なしの全ロータリアンの暖かい庇護あって、今や十萬部の発行を見るに至り、内容も素晴らしくなり、広告も楽にとれることとなった。さすがロータリーなればこそと感銘しております。

7、ロータリー五十年史など

昭和四十一年(一九六六)一月一日、熱海の大野屋で開かれたガバナー、ガバナーノミニおよびパストガバナー会議で、わが国のロータリー五十年を

記念して、その五十年史の編集を行なうことが決められた。

準備委員として、遠藤健三、加藤 章、神野太郎、柏原孫左衛門、絹川清、松田昌平、宮脇 富、直木太一郎、佐々木孝三郎、手島周太郎、東ヶ崎潔、露口四郎の十二名が選ばれ、七月二十七日、東京帝国ホテルで開かれた第一回準備委員会委員長に宮脇富を互選し、ガバナーの承認を得た。また資料収集の分担として遠藤は露口四郎、絹川清とともに三六〇地区を担当した。準備委員会は次回より正式の委員会となり、以後三十二回の編集委員会が五年間にもたれたが、私は完全無欠席であった。

昭和四十五年(一九七〇年)十月二十日、東京の帝国ホテルで、東京ロータリークラブの創立五十周年記念祝賀会が、全国のガバナー、パストガバナーを迎えて行なわれた。しかし、東京ロータリークラブのチャーターメンバーはみな物故して、その五十年を語るものはなかった。

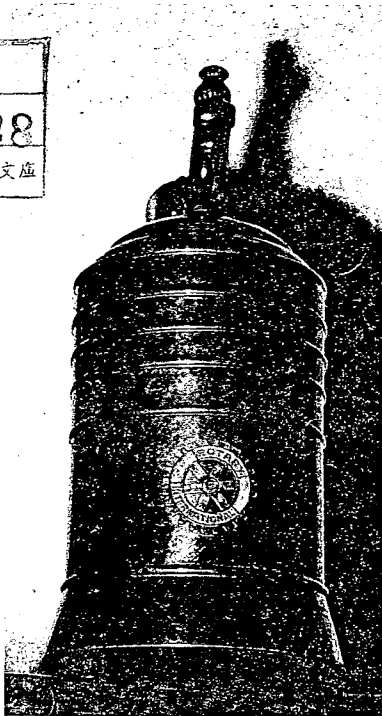
昭和四十六年(一九七一)六月三十日、「ロータリー五十年史」はB5版、四三〇頁の上装版として上梓された。五十年史が立派に完成したのは「ロータリーの友」編集室が設けられていたからであった。小池光三は装幀、レイアウトその他造本全体の諮問に応じて尽力し、川崎覚太郎は最初から全般にわたって協力した。この中には、もちろん、二六三地区に関わる歴史も収められているが、詳細を記すべしは得られていない。

「ロータリーの友」も号を重ねると共に節目ごとに特集を行ない昭和四十八年(一九七三)一月号の「ロータリーの友」は「友」二十周年に寄せて「里

26

2088

ロータリー文庫



を特集し、遠藤健三、露口四郎、佐久間長吉郎、兼松理、西村大治郎の寄稿によって、「友」のあゆみを振り返り、今後の課題を語った。また昭和五十七年（一九八二）十二月十日、東京プリンスホテルにおいて、座談会「ロータリーの友、三十周年を記念して」か、遠藤健三、佐久間長吉郎、松平一郎、平島健次郎の出席によって行なわれ、翌五十八年二月号「ロータリーの友」に掲載された。

これらには、「ロータリーの友、創刊の頃のこと」が語られており、五十年史には収載されていないことも多く収められている。昭和五十八年は、「ロータリーの友」創刊三十年にあたったため、東京銀座、岐阜西、大垣西、羽島、岐阜東などの各クラブでの卓話を行なうとともに十一月二十日、名古屋名鉄グランドホテルで行なわれた第二六三地区雑誌委員長研修会においても語った。

十一月には、「ロータリーの友」より委員長を務め「ロータリーの友」名付け、生みの親として創刊に携り発展に多大の貢献をしたことにより、創立三十

周年を記念して感謝状と記念品の贈呈を受けた。昭和五十九年（一九八四）七月、岐阜ロータリークラブ創立五十周年をむかえ名譽幹事に就任した。

昭和六十年（一九八五）四月、岐阜ロータリークラブ創立五十周年記念にあたり、創立三十周年、同四十周年のときに上演された記念劇「われら三十年のあゆみ」（岡本茂作）の脚本が上梓された。ここには岐阜ロータリークラブ創立のころのことが、会話の形をとって記録されている。

今回、それらを集大成して、まとめて残すことができたことを喜んでいる。

岐阜ロータリークラブの創立以来五十一年、私は無欠席を通しつづけている。また創立から昭和二十九年（一九五四）まで二十年間（内九年間は国際ロータリーより脱退）幹事に就任していた。おそらく世界記録であろうと信ずる。今日の健康はロータリーに忠実であつたればこそと確信し、祖先に感謝し、併せてロータリー諸君に深甚の敬意を表して擲筆する。

February 23rd 1955
To Mr Kenzo Endo :
As a taken apprication of his
continue and enthusiastic Ser-
vices for twenty years as Secre-
tary of the Rotary Clube of
Gifu, Japan.

略 歴

- 明治三一年九月五日 出生
- 大正四年三月 岐阜市立岐阜商業学校四年修了
- 大正五年三月 東京商工学校土木科卒業
- 大正六年三月 早稲田工手学校建築科卒業
- 大正九年三月 早稲田大学理工学部建築選科修業
- 大正十三年九月 合資会社エンド建築工務所社長
- 昭和五年一月 欧米二十五ヶ国へ一ヶ年視察
- 昭和十年四月 岐阜ロータリークラブ創立会員幹事に選任され二十年間在任
- 昭和十九年七月 (公)エンド建築工務所を發展的解散、大日本土木株式会社を創立し社長就任 (至三十五年十一月)
- 昭和二十六年十一月 成和建设株式会社を創立し社長就任
- 昭和二十七年七月 「ロータリーの友」編集委員長 (至三一年六月)
- 昭和三五年五月 ㈱成和を創立し会長就任 (至現在)
- 昭和三九年七月 岐阜ロータリークラブ会長
- 昭和四一年四月 国際ロータリー日本五十年史編集委員 (至四六年六月)
- 昭和五一年十月 産業功勞者として叙勲銀盃下賜
- 昭和五八年十一月 「ロータリーの友」創刊三十周年記念感謝状と記念品を受く
- 昭和五九年七月 岐阜ロータリークラブ名譽幹事
- 昭和六十二年六月一日発行

著 者 温 故 知 新
著 者 温 故 知 新
発 行 者 第二六三地区 渡 辺 遠 藤 健 三

26